

没後10年

詩人・茨木のり子の世界



撮影 谷川俊太郎

2016年 2017年
12月17日～2月11日

徳島県立文学書道館

開館時間 9:30～17:00

月曜休館 *ただし年末年始(12月28日～1月4日)は休館。
1月9日(月・祝)は開館、10日(火)休館。

ばさばさに乾いてゆく心を
ひとのせいにはするな
みずから水やりを怠っておいて(略)

駄目なことの一切を
時代のせいにはするな
わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ

(「自分の感受性くらい」より)

◆講演会「茨木のり子の詩」

2016年12月18日(日) 14:00～15:30

講師 高橋順子(詩人)

◆朗読会「茨木のり子を読む」

2017年1月15日(日) 14:00～15:00

朗読 岩瀬弥永子(元四国放送アナウンサー)

ギター演奏 平岡範彦

観覧料 一般 510円(400円)

高校・大学生 350円(280円)

小・中学生 250円(200円)

※()内は20人以上の団体割引料金。小・中・高校生は土・日・祝日・
冬休み期間中無料。65歳以上の方、各障がい者手帳をお持ちの方は半額。

主催 徳島県立文学書道館

後援 徳島新聞社 四国放送



茨木のり子の自作版画の年賀状。
1971年、2人の甥に宛てたもの（宮崎治氏所蔵）

「わたしが一番きれいだったとき」
「自分の感受性くらい」などの詩で、
時代を生きる精神を鮮やかにうたい、
今なお多くの人に愛され続ける
詩人・茨木のり子(1926～2006年)。
「現代詩の長女」と呼ばれ、凜として
戦後の混沌とした時代をリードした
茨木の清冽な作品世界と、女性として
日々の暮らしを大切に生きた生き
方を紹介します。



詩集『自分の感受性くらい』(1977年 花神社)

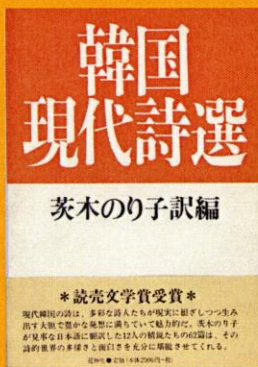


小学生の頃の茨木のり子

わたしが一番きれいだったとき
街々はがらがら崩れていつて
とんでもないところから
青空なんかが見えたりした
わたしが一番きれいだったとき
まわりの人達が沢山死んだ
工場で 海で 名もない島で
わたしはおしゃれのきつかけを落してしまつた
〔「わたしが一番きれいだったとき」より〕



20歳の頃の茨木のり子（山形県鶴岡市にて）



第42回読売文学賞を受賞した
茨木のり子訳『韓国現代詩選』(1990年 花神社)



茨木のり子の死後発見された「Yの箱」。表に夫・安信のイニシャル「Y」が書かれ、中に夫への想いをつづった40篇の詩の原稿が収められていた



茨木のり子が川崎洋と2人で創刊した雑誌「権」の同人たち。左から谷川俊太郎、大岡信、川崎洋、水尾比呂志、茨木のり子、友竹辰（1956年）



◆講演会（12月18日）・朗読会（1月15日）申込方法 **要申込・入場無料**

往復ハガキ（1人1枚）に講師名または出演者名、郵便番号、住所、氏名（ふりがな）、年齢、電話番号を明記の上、当館まで郵送してください。
当館1F受付でも申し込めます。

交通アクセス（JR徳島駅から）

- 徒歩 約15分
JR徳島駅西側のポッポ街を抜けて右折。踏切と助任川を越えて、3つ目の信号交差点を右折して約300m。
- バス
徳島市営バス 7番乗り場「川内循環線（右回り）」に乗車。「吉野本町2丁目」で下車し、徒歩で約5分。
徳島バス 2番乗り場「前川経由」に乗車。「吉野本町2丁目」で下車し、徒歩で約5分。
- 自動車 約5分
国道192号線、藍場町交差点を北進。助任川を渡り、4つ目の信号を右折して約300m。
当館北側に駐車場があります。